

「とばには」「ちから」がある

三輪 ほう子

「つながりが紡ぐことば」

いつもは、最後の最後まで苦しむオビのことばや宣伝コピーが、刊行のひと月ほど前に、すっと口を突いて出てきた。

なぜだろう。3・11東日本大震災のあと、被害の甚大さとマスメディアによるあまりにも大量で衝動的な映像・写真・「活字」の氾濫の前で、書籍編集は、なす術もなく立ち尽くすしかなかった。偶然つかむことになった細い糸の端をたぐり寄せるように、みやぎ教育文化研究センターの方々に連絡を取った。この人たちのもつコミュニティ、つながりに依拠することだけが、今、私が本をつくることができる方法だという直感だった。

「……ことばのもつ力を信じ、その力にいまだからこそ頼りたい、いや、いま私たちにできるのはそれだけだ……」（春日辰夫「はじめに」より）

このことばが、私にとっても羅針盤だった。

『センターつうしんNO.63』（2011年6月15日）は、震災特集で、24人の会員が寄稿していた。そこには、「書けません、おゆるしを」ということばも添えられ、「N小学区の

被害があまりに大きく、教え子の家族の葬儀（昨日は5人を失った方、27日には3人を失った方）に参列するたびに、心がどこかに行ってしまうような状況にあります」と綴られていた。

この本の編者の一方である日本臨床教育学会震災調査準備チームは、4月24日に県外から訪れ、センターの方たちとともに、教師たちの語りの聞き取りを始めていた。この聞き取り調査、『センターつうしんNO.63』、そして、7月2日に行われ被災後はじめて宮城県内の教師たちが集う場となった「みんなで語り合いませんか——震災体験から地域・学校・子どもたちを」での語り合いが、この本のもとになっている。

3・11後1年を経て、これらの取り組みが、被災後なんと早い時期に行われていたかと驚く。教師たちは、どの場でも、とつとつと、しかし、あふれ出るように語っている。語ってもらえないのではないか、聞いてはいけないのではないか、よそ者の聞き手のためらいとは裏腹に、教師たちの語りは尽きなかった。それを支えていたのは、震災前から連綿と紡がれてきたセンターを中心とする地域の教師た